Discourse Marker I mean : A Cognitive Linguistic Approach

メタデータ	言語: en 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: 金沢大学
URL	http://hdl.handle.net/2297/45257

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

様式　7　(Form 7)

学　位　論　文　要　旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

Discourse Marker *I mean*: A Cognitive Linguistic Approach

（和訳または英訳） Japanese or English Translation

談話標識*I mean*　―認知言語学的アプローチ―

人間社会環境学　専　攻 (Division)

氏　　名 (Name)　小　林　　隆

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor)　中　村　　芳　久

（注）学位論文要旨の表紙
Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

学位論文要旨

論文題名： Discourse Marker *I mean*: A Cognitive Linguistic Approach
（談話標識 *I mean*　―認知言語学的アプローチ―）

要約

In this study, using a cognitive linguistic account, I claim that *I mean* is a marker for intersubjective adjustment, based on the basic cognitive abilities of "abstraction," "reference point" relationships, and "intersubjectivity." This study clarifies cognitive process behind a speaker's use of *I mean* and indicates that the labels are only secondary products of intersubjective adjustment or the nature of *I mean*.

At different discourse levels, *I mean* signals that the speaker and hearer should direct their attention to different entities, also signaling the speaker's aim both to direct it to the same one. This is the very cognitive process of what I call "intersubjective adjustment." More specifically, by *I mean*, the speaker directs the hearer's attention to the same objective content at Effective Level, (unconveyed) implicature and (misfired) speech act at the Discursive Level, (threatened) face at Face Level, and (favorable) turn at the Speech Management Level. Although CDS includes pragmatic standpoints and seems to explain every usage of *I mean*, the current CDS in Langacker (2001, 2008) is still not dynamic enough to describe the complicated cognitive process of *I mean*. To solve the issue of dynamicity, a new style of CDS with multiple phases will be suggested at the end of this study.

論文要旨

本論文の目的は、話し手が談話標識 *I mean* を用いる際の動機（使用動機）を、語用論と認知言語学の観点に基づいて明らかにすることである。*I mean* の使用動機には、グライスの会話の公理の逸脱、相手のフェイス保持、話し手と聞き手の想定の調整が大きく関わっている。先行研究では *I mean* のさまざまな語用論的機能が指摘されているが（e.g. Schiffrin 1987、田中・石崎 1994、Fox Tree and Schrock 2002、高原 2002、Imo 2006、Brinton 2008、松井 2009）、それぞれの機能的用法が互いにどのように関連しているのかは不明である。本論文は認知言語学的観点から、*I mean* を「間主観的調整（intersubjective adjustment）」を示すマ

ーカーであると定義し、使用動機の背後に存在する認知プロセスを明らかにすることで、用法間の関係に対して、統一的観点から理論的裏付けを与える。

本論文の構成は次の通りである。第2章で談話標識*I mean*の一般的な特徴と、頻度の高い用法を提示する。第3章では*I mean*の通時的変化を簡潔にまとめたあと、先行研究を紹介し、その決定的な問題点を指摘する。第4章ではグライスの公理とポライトネス理論という語用論の理論に基づいて*I mean*の使用原理を分析する。第5章で語用論の理論では捉えられない*I mean*の用法を取り上げ、Langackerの提唱した認知文法の観点から*I mean*のあらゆる用法における意味的・語用論的側面と構造的側面を分析する。章の終わりで*I mean*以外の談話標識研究に、認知言語学的理論が十分に応用可能であることを示し、第6章で全体を統括する。

第2章では話し手が自らの先行発話の命題内容に言及する用法、自らの意図を明示する用法、発話行為に関する用法、フェイスやターンに関する用法など、*I mean*の具体例を提示する。筆者は2012年9月に金沢大学文化資源学フィールド・マネージャー養成プログラムで、マサチューセッツ州、ボストン市郊外にあるタフツ大学を訪れ、自然発話データを採取した。約7時間30分の音声データの中に、*I mean*は225回用いられており、その用法と頻度を分析した。

第3章で挙げた*I mean*に関する先行研究では、*I mean*は「修正」を表すマーカーであることが当然視されてきた。*I mean*以下の情報が、先行発話の理由なのか、例なのか、意図の明示なのか、あるいは単なる追加的情報なのかという観点から、「理由付け」、「例示」、「明示化」、「関連情報の追加」などのラベルを貼ることが専らの関心事であった。そのため、「なぜ話し手が*I mean*を用いるのか」や「*I mean*を用いて何をしているのか」という背後のプロセスが等閑視され、結果として、例えば*I mean*以下の発話が命題内容に対する理由であっても、質問や勧誘などの発話行為自体の根拠となっていても、話し手の命題態度の原因に言及していても、先行研究ではすべて「理由付け（causal meaning）」の用法として扱われてきた、あるいはそのように扱われる危険性を排除できなかったのである。本論文では、話し手による「修正」の背後に潜むダイナミックな認知プロセスを記述することで、話し手が*I mean*を用いる動機とその動機に基づいて分類された用法間の関係性を明らかにすることを目的としている。本文中で「修正（modification）」の代わりに「言い換え（replacement）」という表現を用いたのはそのためである。

第 4 章では、語用論の観点から、*I mean* が「グライスの公理の逸脱」と「相手のフェイス侵害」を示す談話標識であるとし、言われたことレベルでの逸脱と会話的推意のレベルの逸脱の例を提示した。また、フェイスが関わる用法では、話し手は相手のフェイスを侵害したために、*I mean* に続いてフェイス侵害を軽減したり、相手のフェイスを保持したりする内容に言い換えを行う。そして話し手は自身の言い間違いに際し、*I'm sorry, I mean…*というように、自らの非を認めたり謝罪したりする必要がないことから、*I mean* 全体に共通する特徴として「話し手のポジティブ・フェイス保持」の機能があることを指摘した。語用論の理論によって、話し手による *I mean* 使用の動機には言われたこと、会話的推意レベル、相手のフェイス侵害が密接に関わることを明らかになった。グライスの協調の原則に基づき、話し手は協調的であるが故に *I mean* を用いて後続発話で正しい情報に言い換え（ようとし）たり、意図を明示し（ようとし）たりするのであり、協調的な会話を実現するために *I mean* が用いられることは間違いないと言える（cf. Tomasello 2008）。しかしグライスの公理の逸脱とフェイス侵害という観点だけでは、第 2 章で挙げたような、聞き手の想定を推察する用法や、ターン維持、獲得、開始の用法などを合わせて説明することが難しい。都合によってグライスの公理とポライトネス理論とターンワークの概念を使い分けることは、談話標識 *I mean* の使用原理の解明という趣旨とは異なる。

そこで第 5 章では、認知言語学の CDS（Current Discourse Space：現行談話スペース）という概念を用いて、*I mean* の用法における多様性を認知プロセスに還元して説明することを目指した。

認知言語学では、言語表現の意味は概念化である（我々が世界をどう捉えるかを反映している）とされ、言語表現の特徴を記述する際に、「なぜそのような特徴が現れるのか」ということの根拠を人間の基本的な認知能力に求める。つまり、相手の立場に立つことができるという人間の認知能力が他者との情報の共有や感情の共有といった間主観的な調整の根拠となっている。またこれまでの談話標識研究は主に語用論で扱われる分野であったが、認知言語学では意味論と語用論の差異は程度の差であり、連続したものとして捉えられている。談話標識 *I mean* には動詞 *mean* の本来的意味が反映した用法から、聞き手の想定と話し手の想定を調整する用法、相手のフェイスに配慮した用法、さらには発話のターンを維持・獲得する用法まで幅広い用法があるが、本論文ではそれらの用法を一つの連続体と捉え、各用法における認知プロセスを明らかにするこ

とで、すべての用法に対して統一的な根拠を示すことを目的としている。

すべての *I mean* に共通するのは、「話し手と聞き手が異なる対象に注意を向けているために、*I mean* 以下で同一対象に注意を向けるように促す」ということであり、会話の異なるレベルにおいて、共同注意の達成、つまり間主観的調整が使用動機の根幹にあると言える。言われたことの言い換えの用法（命題内容レベル）は、話し手が認知対象における事物と事物の物理的関係に聞き手の注意を向けさせる用法である。会話的推意の言い換えの用法（推論レベル）では、参照点構造（reference point model）が認知プロセスのベースにあり、話し手が *I mean* と発話したときの話し手と聞き手の想定の差異は、参照点としての字義通りの意味とターゲットとしての会話的推意（意図／推論）の違いとして表される。つまり、話し手は先行発話ですでにターゲットである会話的推意に注意を向けていたのであるが、明示的あるいは非明示的なきっかけによって、話し手は聞き手が自身とは異なる対象に注意を向けていることに気付き、*I mean* を発話し、さらに発話を続けることによって、同一の対象に注意を向けようとするのである。

Verhagen (2005, 2007) における間主観性（intersubjectivity）と主観化（subjectification）の概念を用いて、命題内容や意図に言及する用法から、具体的な想定の調整、ターンやフェイスの調整の用法までを「認知対象の要素から認知主体の要素へのプロファイルシフト」として説明した。Verhagen（2005, 2007）における間主観性の概念によって、これまで「話し手の意図の修正」、「理由付け」、「モニタリング」、「対人的機能」というラベルによって分類されてきた用法に対して、「話し手と聞き手の想定の調整」という明示的な形で理論的根拠を与えることが可能となったが、Verhagen（2005, 2007）にはフェイスワークやターンワークの概念に関する具体的記述がなく、Verhagen の言う間主観性とは具体的な「観点や想定の調整」のことであり、フェイスやターンのような抽象的な概念が関わる *I mean* の用法を説明するには、理論を大幅に修正する必要がある。

そこで、Langacker（2001, 2008）における CDS の概念を援用し、間主観的な調整としてまとめていた *I mean* の用法を、談話構造の異なるレベルの用法として説明する。本来的意味が反映した用法は Effective Level、具体的な情報調整が関わる用法は Discursive Level、フェイスの調整は Face Level、ターンの調整は Speech Management Level に関わるとする。CDS の interaction の部分に「話し手

と聞き手の想定の調整」という Verhagen（2005, 2007）流の間主観性の概念が包括的に説明される可能性はあるようだが、それに関する明確な記述はない。加えて、Langacker（2001, 2008）の認知構造図には一つの言語表現（イントネーション・ユニット）に対して一つの概念化が関わっているように見える。そのため、既存の CDS を用いた分析では以下に示すような、*I mean* の使用動機に関する一連のダイナミックな間主観的な認知プロセスを記述することはできない。

① 話し手と聞き手が異なる対象に注意を向けている。
② 聞き手が異なる対象に注意を向けていることに話し手が気づき、同時に聞き手が話し手も同じ対象に注意を向けていると想定している（勘違いしている）ことに話し手が気づく。
③ 話し手は *I mean* を発話することで聞き手とは異なる対象に注意を向けていることを示し、話し手は後続発話でそれを明示する。

上記のプロセスには①から③の複数の段階が見られる。本論文では Discursive Level における認知プロセスの記述には「複数の段階（phrase）によって構成される CDS」が必要であることを主張し、CDS の新たな形を提案した。フェイスの用法（Face Level）とターンの用法（Speech Management Level）に関しては、前者が認知主体の話し手と聞き手を結ぶインタラクションによって配慮行動が実現するとし、後者が概念化の分野の一つで、物理的対象の観察とは異なるレベルで実現するとした。人間が物理的対象を実際に観察して言語化するのも、仮想世界の出来事を概念化するのも、話し手と聞き手の間で絶え間なく主導権が移動するのを捉えるのも、その違いは詳述性（抽象性）の程度の差であり、言語要素に認知主体の捉え方が反映しているという点ですべて共通していると言える。

Langacker（2001, 2008）の CDS の概念を援用し、根本的な理念は踏襲しながら、新しい形を提案することで、命題内容に言及する用法から、聞き手の想定を推察する用法やフィラーとしての幅広い用法を単一の理論によって説明することが可能となった。*I mean* は「話し手と聞き手が異なる対象に注意を向けている」ことを表し、命題内容、推論、フェイス、ターンの各レベルにおいて、「今から同一の対象に注意を向ける」ことを表す間主観的な調整を表す談話標識であることを示した。また、*I mean* の構造的側面に関しては、Langacker（2009, to

appear）における Anchoring Structure の観点から、*I mean* が節頭に出現する頻度が圧倒的に高いのは anchor として機能しているためであることを明らかにした。

学位論文審査報告書

平成２８年　２月　　１日

1　論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専　攻　　人間社会環境学

氏　名　　小林 隆

2　学位論文題目（外国語の場合は，和訳を付記すること。）

Discourse Marker *I mean*: A Cognitive Linguistic Approach

(談話標識 *I mean*：認知言語学的アプローチ)

3　審査結果

判　　定（いずれかに○印）　　○合 格

授与学位（いずれかに○印）　　博士（ ○文学 ）

4　学位論文審査委員

委員長　　中村 芳久

委　員　　武居 渡

委　員　　堀田 優子

委　員　　西嶋 義憲

委　員　　竹内 義晴

委　員

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5　論文審査の結果の要旨

本論文は、語用論と認知言語学の観点から談話標識 *I mean* に関する諸用法の分析とその背後にある一般原理の解明を追究するものであり、本談話標識研究にはとりわけ理論的分析の進展と深化を顕著に認めることができる。談話標識 *I mean* は、本来、*They're so grown-up now. I mean, they're adults.*のように、*grown-up* を *adults* に言い換え、修正するような場合に用いられるのが、そのプロトタイプ的用法である。そして、ここから多方面に拡張して、*I haven't been to Florida. I mean I have.*のように言い間違いを訂正する場合の用法から、さらには「会話の中での順番取り」など、多様な用法を獲得している。先行研究が、さまざまな用法の単なるリストを提示し、また一つの観点からの窮屈な一般化に終始するところを、本研究は、語用論と認知言語学を構成する諸概念に基づいて、諸用法を丹念に理論的に位置づけ、最終的に妥当性の高い一般化に到達している。

まず、語用論の理論的支柱であるグライスの会話の公理を利用して、各公理と連動する what is said と what is implicated とのレベルの差に基づいてなされる *I mean* の諸用法の整理は、優れて理論的なものである。グライス理論で説明不可能な現象が、それを拡張したポライトネス理論で整理され、語用論の理論的進展の歴史的過程を再確認させる。最終的には、認知言語学の間主観性を導入した観点から、(1)のような一般化を行っている。

(1) 談話標識 *I mean* は、「話し手 S の意図するところとは違うことを聞き手 H が注目していると、話し手 S が見て取ったときに、話し手が *I mean* を用いて「私の意図しているところは（そこではなくて）こちらです」という形で、話し手 S の真意へと聞き手の注意を導く機能」を有する。

この一般化は、本研究が単に一つの談話標識研究ではなく、コミュニケーション全般の考察にも十分益する広がりを持つものであることを示唆している。(1)はラネカー（Ronald Langacker）の提唱する認知文法理論の CDS（Current Discourse Space 現行談話スペース）に基づいて表示される。その表示によって、聞き手である他者の心を読み、それが話し手自らの意図とは異なることを察知し、聞き手側の理解の訂正へと導く談話標識 *I mean* の認知メカニズムがわかりやすく説明されている。本研究は、ヒトのことばの遣り取りでは「心の理論」が不可欠であることを示すだけではなく、間主観的な理解の調整がどのように行われるのかを具体的に説明する示唆に富む深みのある研究になっている。

論文審査会では、本論文の中心となる論点(1)に対しては、以下のような疑問が 3 点指摘された。① *I mean* の用法が種々の方向に拡張するが、そもそも *I mean* の字義通りの意味はどのようなものなのか。② 談話標識 *I mean* を認知文法理論の CDS で表示する際に、この談話標識に導かれて聞き手 H が新たに理解する意味内容の表示の位置が適切かどうか。③ CDS での表示の際に、認知文法理論の最新版にしたがって、ヴァーチャルな概念形成者を想定する必要があるのではないか。以上の指摘に対して、以下の考察が示された。① については、認知文法理論における意味（meaning）はプロセスとしての概念化（conceptualization）であるから、I mean=I conceptualize という方向で、*I mean* の字義通りの意味を捉えることが可能である。② については、後の議論で、聞き手 H が新たに理解する意味内容を CDS の中で早めに表示すると、*I mean* 無しで新たな発話がなされた場合と同じになるため、論文のまま維持されうる。③ については、その後の議論で、ヴァーチャルな概念形成者を導入することによって、どの程度の記述上の精緻化が望めるかに関する考察は今後の課題としてよく、現時点の論点に支障はきたさない。疑問点に対するこのような考察に加えて、「‘I

conceptualize' 概念化のプロセス」という本来の意味を持つ *I mean* は、談話標識としては分析性が極めて低く、本来の *I mean* の意味の何が希薄化し、談話標識としての *I mean* に何が残っているか、あるいはどう変化したのかは課題として残るものであり、認知文法の枠組みでどのように位置づけることができるか、という点で、語用論と認知言語学のインターフェイスを探る契機を、本研究が提供することにもなっている。上記の①～③は、いずれも重要な指摘であるが、本論の中心論点を揺るがす問題ではないと判断される。

本論文は、先行研究を網羅的に検討し、その批判も生産的なものである。とりわけデータ収集に関して特筆すべき点は、金沢大学文化資源学フィールド・マネージャー養成プログラムの助成を得て、かつて申請者が留学したタフツ大学の協力の元、自然発話データを採集していることである。7時間半あまりの音声データの中に出現した225例の *I mean* 使用例の解析が、コーパス・データ等の膨大なデータ解析からも得られない、臨場感を活かした細やかな分析と、緻密な先行研究の批判とを可能にし、著名な研究者の分析を凌ぐ研究成果を可能にしたと言える。

以上のとおり、本研究は、先行研究の精査と批判、分析の基礎となるデータの質と量、語用論から認知言語学に至る各理論の理解、最終的な原理的説明まで、博士論文の水準を十分に充たしており、審査員一同、合格と判定した。